

東レ株式会社

人は、人と、響きあう。



時代をこえて、国境をこえて、  
幸福のハーモニーをもっと広げたい。

私たちは、国際的な多角的事業活動を展開する一方で  
科学技術、芸術文化、スポーツ振興など  
数々のプログラムを通じて、  
世界中の国々の人や社会に貢献したいと願っています。

人は、人と、響きあう。  
東レは人間を見つめ続けます。

**'TORAY'**  
Innovation by Chemistry

# ユーリ・バシユメツト & モスクワ・ソロイスト

Yuri Bashmet & Moscow Soloists

2016年6月9日(木) 19:00開演

東京芸術劇場 コンサートホール

7:00p.m., Thursday, June 9, 2016 at Tokyo Metropolitan Theatre Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ 協賛：東レ株式会社

後援：ロシア連邦大使館

おかげさまで40年  
40<sup>th</sup>  
Anniversary  
JAPAN ARTS

## シューベルト／マーラー編：「死と乙女」D.810 (弦楽合奏版)

Schubert/Mahler: Der Tod und das Mädchen D.810

第1楽章：アレグロ	I. Allegro
第2楽章：アンダンテ・コン・モート	II. Andante con moto
第3楽章：スケルツォ、アレグロ・モルト	III. Scherzo: Allegro molto
第4楽章：プレスト	IV. Presto

## バッハ：ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 BWV1052 ピアノ：ドミトリー・マスレエフ

J.S.Bach: Concerto for Piano No.1 in D Minor, BWV1052 Piano: Dmitry Masleev

第1楽章：アレグロ	I. Allegro
第2楽章：アダージョ	II. Adagio
第3楽章：プレスト	III. Presto



## チャイコフスキー：アンダンテ・カンタービレ (ヴィオラと弦楽のための)

～弦楽四重奏曲第1番より第2楽章

Tchaikovsky: Andante Cantabile from String Quartet No.1, 2<sup>nd</sup> Mov.

ヴィオラ：ユーリ・バシュメット  
Viola: Yuri Bashmet

## チャイコフスキー：「フィレンツェの思い出」Op.70

Tchaikovsky: Souvenir de Florence, Op. 70

第1楽章：アレグロ・コン・スピリト	I. Allegro con spirit
第2楽章：アダージョ・カンタービレ・エ・コン・モート	II. Adagio cantabile e con moto
第3楽章：アレグレット・モデラート	III. Allegretto moderato
第4楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	IV. Allegro vivace

## 2016年モスクワ・ソロイスト日本公演スケジュール

6月 5日(日) 宗像 宗像ユリックス	主催：宗像ユリックス事業部 (ソリスト：三船優子)
6月 6日(月) 小金井 宮地楽器ホール(小金井市民交流センター)	主催：公益財団法人武蔵野文化事業団
6月 9日(木) 東京 東京芸術劇場コンサートホール	主催：ジャパン・アーツ
6月10日(金) 大阪 いざみホール	主催：いざみホール



©Oleg Nachinkin

## ユーリ・バシュメット (芸術監督/指揮・ヴィオラ)

Yuri Bashmet, Artistic Director/ Conductor &amp; Viola

その卓越した演奏技術、強烈な個性と高い音楽性により、ヴィオラという楽器に新たな存在感を与えたバシュメットは、現代の傑出した音楽家として、世界中の舞台に指揮者、ソリスト(ヴィオラ)という二つの役を担って登場している。

1953年ロシアのロストフ・ナ・ドヌ生まれ。1976年ミュンヘン国際コンクールのヴィオラ部門で優勝したことが、世界的なキャリアへの出発点となった。以来、ソリストとしてベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ボストン響、シカゴ響、モントリオール響、ニューヨーク・フィル、ロンドン・フィル、ロンドン響をはじめとする、世界のあらゆる一流オーケストラと共演を重ねている。

1992年にモスクワ・ソロイストを創設。以来、指揮者・ソリストとしてモスクワ、アムステルダム、パリ、東京、ニューヨーク、ロンドンなど世界中で熱狂的な歓迎を受けている。この他、ドレスデン・フィル、東京フィル、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、カメラータ・ザルツブルク、ロイヤル・リヴァプール・フィル、ブリュッセル・フィルに指揮者、ソリストとして招かれ、国立ノーヴァヤ・ロシア響では首席指揮者を務めている。室内楽では、リヒテル、クレーメル、ロストロポーヴィチ、グートマン、ムローヴァ、ポロディン弦楽四重奏団、ムターらと共演している。ヴェルビエ音楽祭、別府アルゲリッチ音楽祭(日本)など、多くの音楽祭にも出演。CDを多数リリースしており、ディアパソン・ドール賞のほか、グラミー賞にもノミネートされており、モスクワ・ソロイストとの録音も高く評価されている。

使用楽器は1758年テストレー製。



## モスクワ・ソロイスト

Moscow Soloists

モスクワ・ソロイストは、1992年にヴィオラのユーリ・バシュメットによって創設された。これまでに、カーネギー・ホール(ニューヨーク)、モスクワ音楽院大ホール、コンサートヘボウ(アムステルダム)、サントリーホール(東京)、バービカン・ホール(ロンドン)、フィルハーモニー(ベルリン)他、世界有数のコンサートホールで公演を行い、いずれも好評を博してきた。

共演した演奏家としては、リヒテル、クレーメル、ロストロポヴィチ、レーピン、サラ・チャン、ゴールウェイ等、錚々たる名が挙がる。

1994年、2006年にリリースしたCDはグラミー賞にノミネートされ、2007年にはストラヴィンスキーとプロコフィエフの作品を収録したCDがグラミー賞を受賞した。

これまでに、世界各国での音楽祭に出演。エヴィアン・ロストロポヴィチ音楽祭(フランス)、モントルー音楽祭(スイス)、シドニー音楽祭、バース音楽祭(イギリス)、BBCプロムス(イギリス)、「プレスティージュ・ド・ラ・ムジーク」(フランス)、ソニー・クラシカル音楽祭(フランス)、「トゥール音楽週間」(フランス)、「12月の夕べ」(ロシア)などの権威ある音楽祭に頻繁に出演している。

世界5大陸の40カ国以上での公演に出演し、いずれも聴衆の熱烈な喝采を浴びている。レパートリーは200曲を超え、クラシックの名曲や、演奏される機会の少ない過去から現在に至る作曲家の作品を網羅している。プログラムは斬新で、バラエティに富んでおり、魅力的な曲が初演されることも特徴の一つである。ロシア内外の様々なテレビ番組に出演しており、そのコンサートはBBC、バイエルン放送、フランス放送、NHKといった世界を代表する放送局によって度々収録され、放送されている。

**Moscow Soloists** Yuri Bashmet, Artistic Director/ Conductor & Viola

### First Violins

\*Andrei Poskrobko  
- First Concertmaster  
Mikhail Ashurov  
Irina Shevliakova  
Olgo Kolgatina  
Kirill Ashurov

### Second Violins

\*Artem Dyrul  
Maxim Gurevich  
German Beshulya  
Artem Kotov  
Andrei Baskin

### Violas

\*Vitaly Astakhov  
Nina Macharadze  
Roman Balashov  
Alexander Ilatovsky  
Andrei Usov

### Cellos

\*Alexei Naidenov  
Alexei Tolstov  
Alexander Lunegov

### Double Bass

Maxim Khlopiev

\* Leader



## ドミトリー・マスレエフ (ピアノ)

Dmitry Masleev, Piano

「ドミトリー・マスレエフは間違いなくひとつの発見であり、素晴らしいピアニストである。私は彼の成功を心から嬉しく思う。彼はこの成功に値する」-ボリス・ベレゾフスキー (ピアニスト)

マスレエフは、2015年に行われた第15回チャイコフスキー国際コンクールにて、聴衆とメディアの両方から審査員の全員一致の決定を認められた。これは権威ある音楽コンクールにおいても実にまれなことである。

批評家は、その精密な演奏、欠点のないテクニック、形式のセンス(『ネヴァ・タイム』)、あらゆるピアノ技術の保有(『ロシースカヤ・ガゼタ』)、輝かしさ、叙情性、自信、自然な自分のスタイル(『コメルサント』)など、多方面からマスレエフの芸術性を評価した。

1988年、ロシアのウラン・ウデ生まれ。モスクワ音楽院でミハイル・ペトゥホフに師事。2011年に同音楽院を卒業後、2014年に大学院を修了。2014~15年に、イタリアのコモ湖国際ピアノアカデミーで研鑽を積む。

2010年の第7回アディリア・アリエヴァ国際ピアノ・コンクール(フランス)、2011年の第21回ブレリオ・ショパン国際ピアノ・コンクール(イタリア)、2013年のアントニオ・ナポリターノ国際ピアノ・コンクール(イタリア)など数々のコンクールに入賞した。2014年には第2回ロシア音楽コンクールにて第3位を受賞。

チャイコフスキー国際コンクール優勝後は、ロシア、フランス、ルーマニア、ドイツ、イタリアで積極的に演奏活動を行っている。2015年8月には初来日し、ゲルギエフ指揮/PMFオーケストラと共演した。

柿沼 唯(作曲家)  
Yui Kakinuma

## F.シューベルト(1797-1828) /G.マーラー編

### 「死と乙女」D.810 (弦楽合奏版)

600曲にのぼる歌曲に代表されるように、ロマン主義芸術の創作にそのあふれる才能を発揮したシューベルトだが、そうした彼の音楽は、どちらかといえば地味な弦楽四重奏の分野においても、類いないロマンの美をもたらした。古今の弦楽四重奏曲中の傑作として名高い「死と乙女」四重奏曲は、シューベルトには珍しく約3年もの月日をかけて、1826年に完成されたシューベルト晩年の作品であり、曲全体が悲哀感や怒りの感情といった暗い色調におおわれた、まさにロマン主義音楽の一つの精華と呼ぶにふさわしい作品である。この作品ではすべての楽章が短調で書かれ、そこにはシューベルトの絶望的な心境と、夢のような美しさの裏側で常に死と向き合い、生はそのはかなさゆえに美に憧れるというロマン主義の美意識が、すべての瞬間を取りまいている。中でも白眉は、第2楽章に置かれた変奏曲だろう。タイトルの由来ともなったこの変奏曲は、自作の歌曲「死と乙女」の伴奏部分を主題とし、それに6つの変奏とコーダが続く、まことにシューベルトらしい魅力にあふれた音楽であり、有名なピアノ五重奏曲「ます」の第4楽章とともに、シューベルトの変奏曲の双璧といわれている。

この名作は近年、マーラーが1894年に編曲した版に基づく弦楽合奏版で演奏される事も多く、今回もそのマーラー編曲版での演奏。厚みを増した弦の響きにより、この曲特有のドラマティックな色調が際立つ。

**第1楽章：アレグロ**は、リズム動機を中心とした暗い色調の主題による力強い音楽で、シューベルトの室内楽ではもっとも規模が大きい一曲となっている。

**第2楽章：アンダンテ・コン・モート**は、歌曲「死と乙女」の伴奏部分の、まるで死の足音が近づいてくるようなリズムによる主題が最弱音で奏されて始まり、この単調ともいえる主題が続く6つの変奏によって、極上のリリシズムとドラマをはらんだ楽想へと変貌してゆく。

**第3楽章：スケルツォ、アレグロ・モルト**は、シューベルト流のレントラー（ドイツの3拍子の民族舞踊）のスタイルによる。

**第4楽章プレスト**は、6/8拍子によるタランテラ風の急速なフィナーレで、切迫感みなぎる楽想を燃焼させてゆく。

## J.S. バッハ(1685-1750)

### ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 BWV1052

バッハは、断片1曲を含め全部で8曲のチェンバロ協奏曲を残した。これらはバッハが聖トーマス教会学校カントルとしてライブツィヒにいた時期（1735～40）に、市民と大学生の演奏団体「コレギウム・ムジカム」の指導者としての演奏活動の中で、自身が演奏し指揮する目的で書かれたもので、音楽史上初のチェンバロ協奏曲として知られる作品群である。8曲はいずれも、旧作の様々な協奏曲を編曲したものであることが分かっている。今回ピアノ独奏と弦楽合奏で演奏されるこの第1番は、8曲中もっとも完成度の高い傑作として知られ、独奏パートが繰り返し広げる技巧的なパッセージが

協奏曲の醍醐味を満喫させる人気曲だ。原曲はヴァイオリン協奏曲と考えられているが、現存しないため経緯は不明。エネルギーで緊迫した第1、第3楽章に対して、第2楽章では延々と繰り返される低音のオスティナート音型の上に独奏パートが精緻な装飾を施す即興的スタイルとなる。

**第1楽章：アレグロ**

**第2楽章：アダージョ**

**第3楽章：プレスト**

## P.チャイコフスキー (1840-1893)

### アンダンテ・カンタービレ(ヴィオラと弦楽のための)

チャイコフスキーならではのロシア的な憂愁に満ちたメロディの中には、実際の民謡を借用したものも少なくないが、この「アンダンテ・カンタービレ」のメロディは1869年の夏、ウクライナのカメンカという村にある妹の家に滞在していたときに耳にした、ペーチカを作る職人のうたう民謡を借用したものといわれている。弦楽四重奏曲第1番の第2楽章として書かれたこの曲は、今日では今回のような編曲で単独に演奏されることが多く、その郷愁をさそう情緒の美しさはたとえようがない。かの文豪トルストイが、この曲を聴いて涙したというエピソードは有名だ。

## P.チャイコフスキー

### 「フィレンツェの思い出」Op.70

交響曲やバレエ音楽など、オーケストラ作品を得意としたチャイコフスキーは、室内楽曲を全部で5曲しか残さなかった。その数少ない一曲である弦楽六重奏曲「フィレンツェの思い出」（今回は弦楽合奏で演奏される）は、1890年、50歳のチャイコフスキーがイタリアのフィレンツェに滞在中に着想されたと伝えられている。フィレンツェは、チャイコフスキーがそれまでも幾度も訪れた思い出の地であった。「フィレンツェの思い出」のタイトルがつけられたのはそのためだが、その内容にイタリア的な要素を探するのは少し難しく、音楽はむしろロシア的な情緒を色濃くたたえている。ロシア民謡を想わせる旋律も随所に織り込まれた、チャイコフスキーらしい一曲である。チャイコフスキーは当初、この曲をパトロンフォン・メック夫人に捧げるつもりだった。弦楽六重奏という比較的珍しい編成を選んだのは、当時健康を害してコンサートに出られなくなった夫人が、自宅でもオーケストラのような響きを聞くことが出来るようにとの配慮からとも推測される。

**第1楽章：アレグロ・コン・スピリト**は、きびきびとした表情の第1主題と、センチメンタルな第2主題によるソナタ形式。

**第2楽章：アダージョ・カンタービレ・エ・コン・モート**は自由なソナタ形式による緩徐楽章。

**第3楽章：アレグレット・モデラート**は、ロシア民謡風のスケルツォ。

**第4楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ**は、素朴なロシア舞曲風の主題に始まり、フガートによる対位法の効果で盛り上がりが見られる。